

国立国語研究所学術情報リポジトリ

近代書き言葉の文体と一人称代名詞の通時的変化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-08-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 明日子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003626

近代書き言葉の文体と一人称代名詞の通時的変化

近藤 明日子

(人間文化研究機構 / 国立国語研究所)

国立国語研究所オープンハウス2021
2021年9月

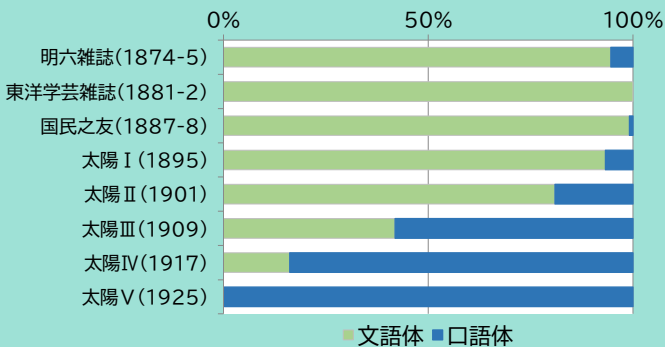
1 研究の目的

- 明治・大正期の論説文・報道文等の非文芸ジャンルの文章における一人称代名詞の体系と通時的変化について明らかにしたい
- 明治・大正期は約60年という短い期間に書き言葉が劇的に変化
 - 言文一致運動により文体が文語体から口語体に転換
 - それに伴い、使用される語彙にも大きな変化
- また、明治・大正期は活版印刷技術の普及やマスメディアの発達により、膨大な量の書き言葉が流通
 - 研究に使用する資料は当時の膨大な書き言葉の縮図となるようなものであることが必要

語彙の一角を占める一人称代名詞の語群の体系と通時的変化を解明するため、明治・大正期の書き言葉の代表性に配慮した『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』を資料として、文体の転換との関わりから分析・考察する

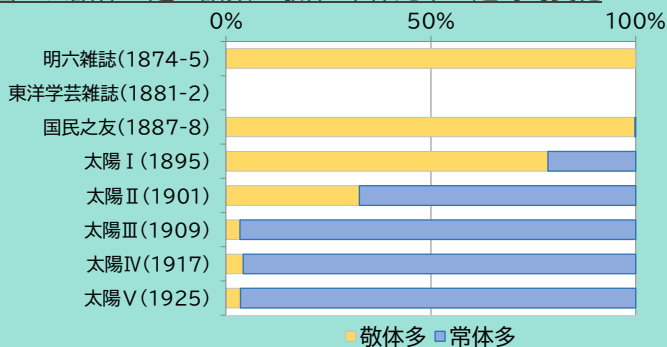
2 明治・大正期の文体の通時的変化

図1 非文芸ジャンルの延べ語数の文体比率の通時的変化



- 明治後期までは文語体が主流、その後、口語体への転換が進み、大正末期には口語体が主流に

図2 口語体の延べ語数の敬体・常体比率の通時的変化

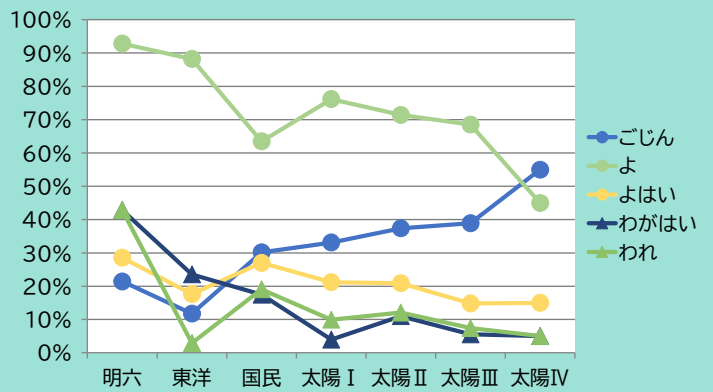


- 口語体の内部では、明治中期までは「です・ます・ございます」等を多用する敬体の文体が主流、その後、「だ・である」を多用する常体の文体に転換、明治後期には常体が主流に

語彙の変化の背景として文体の変化が存在する

3 文語体の一人称代名詞の通時的変化

図3 文語体の主な一人称代名詞の使用著者率の通時的変化



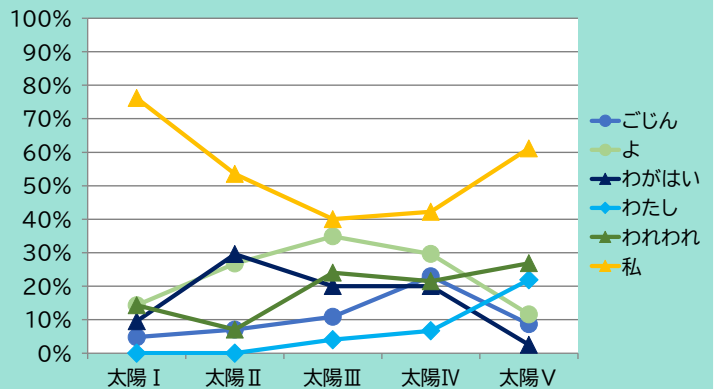
- ・ 単数用法(著者が自分一人を指す用法)の一人称代名詞のみ掲出
- ・ 使用著者率とは一人称代名詞を使用する全著者数に対する該当語形を使用する著者数の割合
- ・ 図4も同様

- 明治中期以降、「ごじん(吾人)」が増加し、大正期にはそれまで最も多く使用される語形であった「よ(余)」を超える
- その他の「よ(余)」「よはい(余輩)」「わがはい(我が輩)」「われ(我)」は減少

「ごじん」を軸とした通時的変化が見られる

4 口語体の一人称代名詞の通時的変化

図4 口語体の主な一人称代名詞の使用著者率の通時的変化



- 当初は「私(わたくし・わたし)」が多くを占める
 - 初期の口語体は演説等の話し言葉を模したものの。敬体が主流であること(図2)もそのあらわれ。一人称代名詞もそれにふさわしい語形「私」が選択される
- 常体の口語体が進展する時期、「よ」「ごじん」といった文語体で主流の語形も多く使用される
 - 口語体が話し言葉の性質を脱し、書き言葉として確立する過程で、すでに書き言葉として確立していた文語体で使用される語形を取り入れたもの
 - しかし文語体由来の語形は定着せず衰退、「私」「われわれ」が残り、現代の書き言葉に繋がっていく

文語体とは異なる体系と通時的変化が見られる
口語体に文語体の語形を取り入れていた時期が見られる

5 まとめ

- 文語体と口語体では一人称代名詞の体系・通時的変化が異なる
- 口語体が書き言葉として確立する過程において、文語体の一人称代名詞の影響があった

このポスターの内容は近藤明日子(著)『コーパスと近代日本語書き言葉の一人称代名詞の研究』(勉誠出版、2021年)に基づいています。